

大室 弘子（おおむろ・ひろこ）

1、プロフィール

横山武夫師の教えを忠実に守り、心に沁みる、写実の歌を生涯作り続けた。

<生没>

1931(昭和6)年7月24日～2005(平成17)年6月8日

<代表作>

『桜の絵時計』

<青森との関わり>

生地は、青森市、大学卒業後、弘前市に居住。

2、作家解説

大室弘子は、昭和6年7月24日青森市生まれ。大学卒業後、弘前市に在住。中学校教員の傍ら60年間短歌を作り続ける。横山武夫に師事。長年、歌誌『アスナロ』で活躍。アスナロは、子規、左千夫、赤彦、藤沢古実、横山武夫と系統の連なる短歌の本道でもある。本人も根本に不動のものを持っていて端正な歌が多い。

- ・山鳩の鳴く声もわびし土におく吾子の御骨のかすかなる音も
- ・阿弥陀尼の御手に引かれて行く吾子の姿思ひて合掌をする
- ・笹の葉に海風吹きて鳴り止まず吾子の眠れるこの北の地は

歌集「桜の絵時計」の巻頭の3首を録した。沈痛な慟哭の声である。味わいの濃い生々とした感情を聴くことができる。

- ・休みなく作歌続けよと書きたまふはがきの文字もありがたきかな
- ・限りある命のこと説きあかすこの生徒らにはほど遠きこと
- ・無給与の休職となるもなほ職にとどまりたく思ふ業の如きか

大室さんは慈愛に満ちた女教師だった。諦念にもかよう静かな心境の1連である。

- ・病名のいくつともなくかさなれば身のまはりをば整へおきたし
- ・師の歌碑の新聞記事を切りぬきて尋ねゆかむ日を病みゐて待てり

病氣と闘いながら熱心に作家活動を続けた。横山武夫の指導を受け正道を学び、温順で確かな歌風を確立した。多年積み上げてきた力量を基礎として優れた歌を残している。自然流露の中にも驚くべき程の鋭敏と工夫の歌を作り続けた。

- ・たたなはる四方の山並日に照りて蝉鳴き止まぬ樹海見おろす
- ・山上に霧立ちのぼり四方の山白夜のごとき底に消え行く
- ・ただ1人のわが歌の師と仰ぎ来ぬ今日向ふ歌碑に涙さしぐみ

3、資料紹介

○『桜の絵時計』

図書

2006(平成 18)年6月8日

209mm×145mm

昭和 22 年～平成 17 年6月までの歌誌「アスナロ」「群山」の掲載誌より選出した遺歌集。